

伴にあり

川口晴絵

ウン？受洗したのに、尚祈られている――毎月配付される祈祷課題に私の名前を見つけて不思議に思った。ある日そのことを牧師さんに尋ねてみると、受洗後一年ぐらいは「救われたのに、こんなはずじゃなかった」と思つて教会から離れてしまう人も多く、祈るのだそうだ。その言葉を深く噛みしめたのは、それからまもなくのことだ。昨年の四月に保育の現場に戻つたのだ。それまでも保育者として勤務し、自分でも小さな保育室を経営したりしてきたが、思うところあつて保育の現場から遠ざかつていた。だが所沢に転居して福祉施設にボランティアに行く内、焼け棒杭に火が付いた感じで、また保育現場を選び、公立保育所の臨職に就いた。

いきなり、変則勤務の中に組み込まれた。早番勤務の時は早朝六時すぎに家を出、遅番勤務の時は帰宅が九時過ぎ。五交代で、八時半から五時迄の普通勤務は、月の内に何回もなかった。行事当番もあつたし、職員会議も頻繁だつた。一般的に公立のほうが私立より勤務が楽なはずだが、保育の現場は住民サービスに重点が置かれるようになり、子どもや

親は著しく変貌し、保育者側の質の違いもあって、まるで浦島太郎になった感じだった。

さらに私を窮地に追い込んだのは、差別感の強い人と担任を受け持ったことだった。何故こんなに変な思いをしなくちゃならないの……。神様に試されているような感じだった。毎日「心身を支えて下さい。伴にいて下さい」と祈った。それでも体が付いていかず胃潰瘍で倒れてしまった。そんな状況になっても、同僚からは慰めの言葉はなく、却って叱責された。

私の心が救われたのはその年の暮れだった。クリスマスコンサート会場の女子聖パウロ教会の講壇に「主が伴にある」と刻まれていたのだった。同じ聖句が、出向いた品川教会の外にも掲げられていた。主が伴にいて下さったから、厳しい職場でも耐えられたのだ。今も主に支えられ日々を生きている。